

挑戦することでしか得ることのできないものがある

渋谷の映像ベンチャー企業、シングメディアのプロデューサーの佐藤一樹です。

AOI Pro.から独立して今年で5年目。

メンバーは16人になり、毎日めちゃくちゃワクワク、ハラハラしてます。

JAC AWARDを受賞したのが、AOI Pro.でプロデューサーとして2年目の2016年。

プロデューサー部門でグランプリをとりました。

当時を思い返すと（今も結果変わらないですが）

ひたすら「挑戦」することに執着していた気がします。

なぜ執着していたのか、

当時仕事をしていた方から、

「映像のクオリティは、制作進行の実力とセンスで決まる、お前には能力がある」

みたいなことを何かの拍子に言われ（そのようなニュアンス）

シンプルに嬉しいと思った反面、

**「であれば、もっともっと能力のレベル上げないと、この先、良い映像なんてつ
れない、良い仕事なんてできない、レベルを上げるには当然チャレンジするしか
ない、挑戦あるのみ」**

みたいなことを思い、勝手に自分で焦り、

とにかく自らのレベルを上げなければ！と、

ひたすら必死だった気がします。

結果的に、自分の中で「これは半端ない仕事かもしれない」という仕事の機会をいくつかいただき、

結果的に、なんとかつくりあげることができ

結果的に、それがめちゃくちゃ最高の映像で（自画自賛は大事）

結果的に、その繰り返しの中で振り落とされないよう必死にやり続け、

結果的に、JAC AWARDという若手を勇気づける賞のグランプリを受賞し、

そして結果的に、独立するという選択をして、

日々、自分が良いと思う映像をつくっていきたい、良い仕事をしていきたい、

ということにジタバタしてますが、まだまだ全然だと思ってます。

受賞したことで、何か恩恵があったかというと

受賞は、自分の目指す道に対しての

「挑戦の証」みたいなものだと思っています。

なんでもそうかもしれませんが、証自体にはなんの意味もありませんが、証を持ったという事実をどう捉えて、どう活用していくかだと思うので、視野が広がったということが一番の恩恵だったのかもしれない。

**広告映像制作のプロデューサーという仕事は、
本当に大変な仕事だからこそ、カッコいい仕事である。**

常々思います。

なぜなら、「100点が0点な世界」だから。

依頼された企画を普通に実現できて0点、何か不備があるとマイナス。

100点以上を目指すには、まずは0点を実現した上でしか加点がない、そんな仕事の責任者という役割の責任を担うって、これはもう、かっこよすぎる仕事だと思います。

だいたいプロダクションマネージャーからキャリアをはじめ、ボコボコにされながらも経験を積み、晴れてプロデューサーになり、さらにボコボコにされながらも経験を積む。

時に、国民的バラエティ番組の歴史的な瞬間に、加藤浩次さんは言い放ちました。

「当たり前じゃねえからな、この状況！」

当たり前な状況を必死こいて作りあげる仕事。

どれだけ考えるんだよ、ってくらい考えるし

どれだけ時間を費やすんだよ、ってくらい費やす。

費やせば費やしたほど理解も進むし、考えも深まるし、反応速度も早くなるし、対応も早い。

ただ、ひとつだけ思うのが、

僕たちの仕事は「がんばった大賞」を獲得することがゴールではない。

がんばってつくった映像が、
消費者がその商品を買うきっかけになったり、
そのブランドを好きになるきっかけになったり、

さらにはその映像をつくったことで
作りあった人たち同士で讃えあい、絆を深めたり、またつくろう！
なんて気持ちになったり、

もっとシンプルなところでいえば
その映像がきっかけとなり自分を含めた誰かが行動する
そんな影響をもたらすことがゴールであり、仕事です。

クライアントや、エージェンシーから受けた依頼や相談に対して
先頭にたち、映像をつくる部分を依頼されるのが広告映像プロデューサーなのだとしたら

その広告映像プロデューサーの視座が高ければ高いほど
映像制作という仕事が、
プロデューサーという仕事が
もっともっと魅力的になると思います。

付度、気を遣う、ホスピタリティ面、段取り面など
精一杯やる必要があるならやればいい。

ただ僕たちは、付度を極めることだけが仕事なのか、段取りをすることだけが仕事なのか、
そうではないと思います。

映像制作の先頭となるプロデューサー自身がめちゃくちゃワクワクし、めちゃくちゃ挑む。
そして周りに、そのワクワクを伝え、巻き込み、
良いと思ってもらえるものをつくるために、ひたすら打ち込む。

その結果、良い映像だったね、良い仕事だったね、という声を生む。
そこにひたすらチャレンジするべきだと僕は思います。

リスクや責任をとってなんぼ

誰もがリスクや責任を進んで負いたくない中で、
リスクや責任を背負うことが当たり前、かつリスクヘッジをとることも当たり前、
な、プロデューサーという仕事に対して
熱をもって、挑むという姿勢は絶対恥ずかしいことじゃないと思います。

その熱のひとつひとつが、
閉鎖的になっていたり、ある種の迷子な状況だったり、といった
今の日々変化し続けるこの広告映像制作業界の空気をぶっ壊し、
ワクワクする世界に進化させるための理由になると思います。

それぞれの価値観や、仕事感観、そしてそれぞれの状況、環境、
ひとつとして同じことはないと思いますが、

良い仕事をして、美味しい酒やノンアルコールドリンクを、
その仕事をやり遂げた仲間と笑い合っ飲み合う、
それくらいシンプルな話だと思ってます。

鬼長くなりましたが、これくらいがちょうど良いのではないかと、勝手に思ったので、
これくらいで終わろうと思います。

有名な恋愛リアリティーショーの最新シーズンで
主役の方が「この旅で鎧を脱ぎたい」と言っていました、
まさにその通りで

僕はこのアワードが
みんなが鎧を脱げる場であるようになってほしいなと
そう願っています。

なんの話

THINGMEDIA Inc.

プロデューサー 佐藤一樹